バウッダ

中村元（なかむらはじめ）　三枝充悳（さいぐさみつよし）

小学館

© H.NAKAMURA M.SAIGUSA 1987

バウッダ
・佛教・

昭和62年3月20日　初版第1刷発行
昭和62年9月20日　初版第8刷発行
定価　2800円

著作者　中村元（なかむら はじめ）
三枝充悳（さいぐさ みつよし）
発行者　相賀徹夫（おおが てつお）
発行所　小学館
〒101 東京都千代田区一ツ橋2-3-1
電話　編集　03-233-4556
業務　03-230-5333
販売　03-230-5739
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　㈱若林製本工場

＊造本にはじゅうぶん注意しておりますが，万一，落丁・乱丁などの不良品がありましたら，おとりかえいたします。
＊本書の一部または全部を無断で複写複製（コピー）することは，著作者および出版者の権利の侵害になりますので，あらかじめ小社あて許諾をお求めください。
© SHOGAKUKAN 1987 Printed in Japan ISBN4-09-558001-1 C0015

序文

本書の題名『バウッダ』は、サンスクリット語の Bauddha（ブッダを信奉する人）にちなんでいる。

古代インドの哲学書では「仏教の教説」のことを「バウッダ・ダルシャナ Bauddha-darśana 」といい、「バウッダ」というときには、どこまでも「仏の教えを信奉する人」のことである。

インドの古典では、学派や宗派を意味する特別の語を用いることが少なくて、その教えを奉ずる個人の複数形が、その学派または宗派を意味する。インドでは、宗教や哲学は、それぞれ各個人のものなのである。社会的権威によって束縛されるものではない。だから、西洋でいう「クリスチャニティ」や「イスラーム」に相当する造語法が、古代インドにはないのである。

現代インドでは、仏教を意味して「バウッダ・ダルマ Bauddha-dharma 」といい、スリランカでは「ブッダ・ダンマ Buddha-dhamma 」あるいは「ブッダ・サーサナ Buddha-sāsana 」という呼称を用いるが、これらの場合には、外から入ってきた諸宗教に対立する宗教、という自覚が強くはたらいている。

ところで、本書は、仏教について、その起原から現代に至るまでを総覧するものであるが、書名を従来のように『仏教』とせずに、あえてサンスクリット語にその言葉を求めて『バウッダ』としたのは、著者と編集者の合議の結果による。

その理由等について、共著者の三枝充悳氏も序文で述べられているように、「仏教」なる用語の使用例は存外に新しく、明治期の日本が欧米「近代」の移入を図った時と軌を一にする。そして、やはり同時期、同様にして「哲学」が新しく造語され、「仏教」、「宗教」の語も本来的意味を改変されて、すでに日常語化して現在に至っているが、それらは必ずしも本源的な概念を包括するものではなく、また表現しきっているものでもない。昔は「仏法」という語で称していたが、「仏教」としたところに、すでに西洋的思惟による変容がなされているのである。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

むしろ、これらの基本的かつ抽象的語彙が日常語化したことによって誤解が増幅され、伝達されていく危険すらはらむ。その典型が「宗教」であり、「仏教」の語であるように思われる。（これら一連の意味することの重大さについて、あるいはその歴史的経過等については、本書後半でさらにこれを詳述した。）

本書は、以上の事柄によって、これら明治期の造語や新用語による観念を大きく超えて企画されたものであり、したがって従来のような、いわゆる「宗教書」でもなければ「仏教書」でもないということになる。

こういう事情を知られるならば、題名に『バウッダ』という名称を用いた所以も理解されるであろう。

なぜこのような特異な書が刊行されることになったのかというと、その経緯は次のごとくである。

すでに数年前から三枝教授と編集部とがしばしば会談され、仏典に関する大きな講座を計画されていたが、諸種の事情の変化が起こったので、その計画を変更し、三枝氏の論稿を中心とし、わたくしが同講座への原稿として依頼されていた論稿を添えて、一冊の書として刊行することになったのである。したがって計画立案者は三枝充悳氏と編集の服部貴氏であり、その功は没すべからざるものがあると思う。わたくしは単なる協力者にすぎないが、わたくしの執筆した部分については、もちろん責任を負うものである。なお、「宗教」と「哲学」の語義に関する拙稿は、編集部の強い希望によって掲載された次第である。

「仏教」に新しい照明の光をあてた書として、読者諸賢の熟思反省のよすがともなれば、幸せである。

昭和六十二年二月

中村　元

仏教とは何かを本書は主題とする。

しかし、「仏教」の語は「仏の教え」を意味する少数の場合を除くと、江戸時代末期まで知られていない。五世紀以前の中国では「道教」とも呼ばれた。また、多種多彩な漢訳仏典中から特定の教えをみずから選び取って「宗（むね・主・本・長）」とすることが六世紀の中国に生まれ、その宗の教えとして「宗教」の語がここに発明された。宗教は仏教の下位概念に属し、仏教徒のあいだでのみ用いられて、わが国でも明治初期まで仏教諸宗は「わが宗教」と称し、かつ仏教は仏道や仏法などの語で扱われた。江戸末期の開国によって一挙に右の諸事情は逆転し、外国語の翻訳として今日の用法が定着する。同時に、それは真の意味の仏教学がわが国にも開始される導火線となった。日本人がそれまで信じ奉じ親しんでいた仏教は、すべてインド仏教にすでにその原型があり、極言すれば、その中の片鱗の結晶とも称し得ることが学界の常識と化した。

こうして、ことごとくがインドに基づく以上、その地の呼称の「バウッダ」が、正確には「バウッダ・ダルマ（またはバウッダ・ダルシャナ）」が問われなければならぬ。本書が『バウッダ（佛教）』と題したのは、それに由来し、この書は一貫して「バウッダ（佛教）」とは何かを明らかにしようとする。

バウッダの語はブッダから派生し、ブッダは、第一に「ゴータマ・ブッダ（釈尊）」に、そして第二に、釈尊からは歴史的に遠く離れた「大乗の諸仏」に連なる。そのために、当然のことながら、「釈尊」と「大乗の諸仏」とは判然と裁断される。

わが国の伝統教学はその配慮を怠り、関心さえ示さず、しばしば偏見と誤解とを交じえた仏教が氾濫（はんらん）して、現在もなおそれが喧伝され、この風潮は山積された仏教書の多くもほとんど変わっていない。過去には、外国の実情は知られず、文献類も伝わらず、往時の教学の必然性が容認されるとはいえ、現状では時代錯誤（アナクロニスム）もはなはだしい。さらに、すでに一世紀以上も世界的に営々と続けられてきた仏教学の諸成果は、一般の仏教理解にはほとんど及んでいない。まことに微力ながらも、現在の仏教学を可能な限り忠実に反映すべく、またわが国

に充満する仏教文化の諸現象にも触れつつ、平明な文章により本書の叙述を進めた。

バウッダ（佛教）はみずからブッダを宣言した釈尊を創始とする。イエスの死後にイエスをキリスト（救世主）として発足したキリスト教とは、まったく異なる。また、『新約聖書』に含まれる諸テクストが当初の数十年間にほぼ完了したのに比して、釈尊とその弟子たちとの言行を伝える唯一の資料である阿含経典は、百余年（別説、二百余年）間の口伝を経て、ようやく現形に整備された。さらに、釈尊入滅後数世紀を隔てて、新たなる「大乗の諸仏」が登場し、大乗諸経典（キリスト教ではあり得ない新しい聖書）が大量に創作された。ただし、それ以後に「仏の出現」はない。後者を信奉して、中国・朝鮮半島・日本・チベットなどの北方の大乗仏教圏が広がり、他方に、今日いっそう活潑な東南アジア一帯の仏教は阿含経典の伝統を守る。

本書では、それらの全仏教圏に通ずる「三宝」を最初に論じ、続いて、阿含、大乗の流れを追い、最後にとくに仏教・宗教・哲学の語の解明を行なった。この最初と最後との部分は、中村元先生の寄稿を仰ぎ、したがって本書は共著となる。以上は編集者の強い意向でもあった。また、末尾に、一種の実践篇として「三帰依文」と『般若心経』とを付した。なお、わたくしごとながら、中村先生には四〇年昔に仏教学の手ほどきを受けて以来、つねに絶大な学恩を浴びつつ今日に至る。

きわめて限られた紙幅のために、なお論述の不足は不可避であった。ただし、古代インド語（サンスクリット語、パーリ語その他）はすべてローマ字化し、カタカナで発音を示し、とくに重要な原語には語解を施したほか、独自の術語・固有名詞・原典の引用などには振仮名を付した。

幾多の困難を極めた編集を長期間にわたり強力に推進された服部貴氏に、ならびに関係された諸氏に、衷心よりの謝意を捧げる。

一九八七年二月

三枝充悳

凡　例　サンスクリット語の読み方

本書は、正確な理解を期するために漢訳語だけに頼らず、原則として、それぞれの術語や固有名詞などにローマ字化したサンスクリット語の原語を付した。このことによって、日本語の中にも多数のサンスクリット起原のあることに気づかれ、言語に関する知的興味もより深まろう。

ちなみに、わが国の「五十音図」は、このサンスクリットのアルファベット（四八種、パーリ語は四一種）を借用してつくられており、日本人にとってもあながち無縁な言語ではない。その読み方や発音については、もとより片仮名で表現することは至難ではあるが、ほぼ大半は日本語のローマ字音と思って発音されてよい。次にその読み方の要領を示す。

母音で長音記号の付くものは伸ばす。ā（アー）、ī（イー）、ū（ウー）、ṝ（リー）。

e・o は、常に長音で読む（エー・オー）。エ・オとは読まない。

ñ は、たとえば母音 a（ア）が付くと「ニャ」。

ś・ṣ は、同じく「シャ」、子音が続く場合多くは「シュ」。

ṛ・ṭ・ḍ・ḥ は、それぞれ r・t・d・h の発音としてよい。

ṅ・ṇ・ṃ は、それぞれ n 音に準ずる。

c は、「チ」または「チュ」。

j は、「ジ」または「ジュ」。

v は、「ヴ」。

そのほか「連声法（れんじょうほう）」（サンディ sandhi）があって、たとえば、ヒマ hima（雪）とアーラヤ ālaya（家・蔵）との合成語は、語尾と語頭との母音を合わせて長音となり、ヒマーラヤ himālaya となるし、また本書末尾の『般若心経』中にあるように、-a（ア）＋e-（エー）・-ā（アー）＋e-（エー）は -āi-（アイ）に、-n（ン）＋c-（チ）は -ṃś＋c-（ンシュ・チ）に変化するなど、規則は多様であるが、本書ではここまで深入りしなくても十分に読める。なお、パーリ語の読みもほぼこれに準ずる。

目次

序文　中村元　1
凡例　三枝充悳　6

第一部　三宝――全仏教の基本　中村元　15
仏教徒の標識「三宝」　15
仏　17
法　21
僧　23

第二部　阿含経典――釈尊の教え　三枝充悳
はじめに　29
第一章　阿含経とは何か　31

序　節　釈尊とその時代　31
①　釈尊の時代　31
②　釈尊の登場と仏教の創始　33
第一節　阿含経について　37
①　阿含経とは何か（1）　37
②　仏の名称　37
③　阿含経とは何か（2）　41
④　阿含経の扱いをめぐる仏教小史　43
⑤　教判とは何か　52
⑥　「大乗非仏説」論　55
第二節　阿含経のテクスト成立について　63
①　テクストと文献学（1）　63
②　テクストと文献学（2）　65
③　アーガマ文献の成立史（1）　69
④　アーガマ文献の成立史（2）　74
第二章　阿含経のテクスト　78
第一節　阿含経のテクストの概要　78
①　パーリ五部と漢訳四阿含（1）　78
②　パーリ五部と漢訳四阿含（2）　83
③　漢訳経典の伝承　86
④　その他の諸テクスト　90
第二節　阿含経テクストの検討　91

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

①　阿含経テクストの検討　91
②　阿含経に基づく思想研究の方法　97
③　『ダンマパダ』とその第一八三詩　102

第三章　阿含経の思想　113

第一節　阿含経の基本的思想　113
①　基本的立場　113
②　こころ　118

第二節　阿含経の諸思想　120
①　苦　120
(1)　欲望に基づく苦　121
(2)　無知に基づく苦　122
(3)　人間存在そのものに根ざす苦　123
(4)　無常に基づく苦　123
②　無常　124
③　無我　131
④　四諦・八正道・中道　138
⑤　法　143
⑥　縁起　145
⑦　ニルヴァーナ（涅槃）　150
⑧　戒・平等・慈悲　154

第三部　大乗経典――諸仏諸菩薩の教え

三枝充悳

第一章　大乗仏教の成立　161
第一節　大乗仏教とは何か　161
①　大乗・大乗仏教という語　161
②　大乗仏教への道（1）　166
③　大乗仏教への道（2）　172
④　大乗仏教への道（3）　182
(1)　仏塔崇拝　183
(2)　讃仏文学と仏伝文学　187
(3)　諸仏の出現　191
第二節　大乗仏教の成立　195
①　大乗仏教成立への諸要因　195
②　大乗仏教運動について　196
第二章　菩薩　199
第一節　「菩薩」という術語　199
①　「菩薩」の語義　199
②　「菩薩」の語の起原　202
③　「菩薩」の語の展開　206
第二節　大乗の菩薩　207
①　大乗の諸仏　207
②　大乗の菩薩（1）　215

(1) 法蔵菩薩 216
(2) 観音菩薩 218
(3) 文殊菩薩 222
(4) 普賢菩薩 222
(5) 勢至菩薩 223
(6) 虚空蔵菩薩 223
(7) 地蔵菩薩 223
(8) 日光菩薩・月光菩薩 224
③ 大乗の菩薩(2) 224
④ 大乗の菩薩(3) 227

第三章 大乗経論とその思想 234
序節 「経」と「論」 234
第一節 初期大乗仏教 245
① 般若経典 245
② 維摩経典 255
③ 三昧経典 258
④ 華厳経典 259
⑤ 浄土経典 263
⑥ 法華経典 265
⑦ その他の初期大乗経典 268
⑧ ナーガールジュナ(龍樹) 270
第二節 大乗仏教中期・後期 275

①　中期・後期の大乗仏教の概要　275
②　如来蔵　276
③　唯識説　280
④　密教　288
第三節　大乗文化　299

第四部　「宗教」と「哲学」の意義　中村　元　309

第五部　経典読誦のすすめ　中村　元　三枝充悳

三帰依文　333
般若心経　338

主要参照文献　346
索引　348

装丁　玉井ヒロテル
校正　藝梓
清家道子

第一部

三宝――全仏教の基本

中村　元

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com